九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中島敦「文字禍」論 ： 「文字の霊」が発生する文字観のもたらす禍

河内, 重雄
九州大学大学院人文科学研究院 ： 専門研究員

https://doi.org/10.15017/1456070

出版情報：九大日文. 22, pp.25-37, 2013-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

中島敦「文字禍」論

――「文字の霊」が発生する文字観のもたらす禍――

河内重雄（KOUCHI Shigeo）

一　本稿の狙い

「文字禍」（『文学界』昭和十七年二月）は、「山月記」、「狐憑」、「木乃伊」[1]と共に古譚四編をなす、アッシリアを舞台とした三人称の小説である。

「文字禍」（以下、本作品とする）の内容は次のように要約できよう。アシュル・バニ・アパル大王治世第二十年目の頃、毎夜誰もいない図書館の闇の中で、ひそひそと話し声がする。大王は「文字の霊（というものが在るとして）」[2]の声と考え、この霊についてナブ・アヘ・エリバ博士に研究するよう命じる。博士はまず、万巻の書を繙き調べるが、徒労に終わる。そこで、自力で解決すべく、終日一つの文字を見詰めていると、その文字が解体し、意味のない線の交錯としか見えなくなってくる。単なるバラバラの線が一定の音と意味をもつ以上、一定の音と意味をもたせる「文字の霊」は存在することを博士は認める。この発見を手始めに、文字を覚える以前に比べて職人は腕が鈍り、猟師は獅子を射損なうことが多くなったなど、様々な「文字ノ精」の「悪戯」を博士は発見し、書き記していく。家が木材と石と煉瓦と漆喰との意味のない集合に化けてしまうなど、「文字の霊」のために「奇体な分析病」に罹った博士は、これ以上研究を続けることは危険だと思い、「文字への盲目的崇拝を改め」るよう意見を加えた研究報告を急ぎまとめ、大王に献じる。大王はその報告に機嫌を損じ、博士に謹慎を命じる。謹慎中、地震で倒れた粘土板により、博士は圧死する。

以上の要約や作品タイトルからも明らかなように、本作品は、大枠としては「文字の霊」（「精」・「精霊」）の実体化とその弊害をテーマとしている。

本稿では、現代の読者には馴染みの薄い「文字の霊」という言葉が、作品発表当時の読者にどのように受け取られ得たか、という問いを出発点とする。このことは先行研究でもあまり考察されておらず、「文字の霊」という言葉はそもそも中島敦のオリジナルな言葉なのか、それとも特定の人達が使っていた――それ故、特定の学問領域等に注意を向けさせる――言葉なのかも明らかにされていない。

まず、同時代にこの言葉の用例を確認できるかだが、以下四つを用例として挙げることができる。

①　明治天皇の御製に

天地もうこかすはかり言の葉の
まことの道をきはめてしかな

「大宇宙を動かす程の言の葉の道を究めん」との大詔が、言霊御研鑽の聖慮と拝察し奉るのである。（略）

斯く偉大なる力の言葉は、技巧的に言葉を組み合せて談話となるものではなく、言葉の奥に霊魂が働いてゐるので、此の霊の働き如何によつては人を感激させたり、又よく天下をも動かすのであつて、之が即ち言霊の神秘である。（小寺小次郎『言霊研究入門』（昭和十八年七月　文淵閣）。同書によると、昭和十五年に初版発行）

②

（略）西洋語学でもシユプラハガイスト、ヂイニアス・オヴ・ラングエイヂ、ジエニ・デユ・ランガアジユなどといふ「言霊」と同義の現代語があるが、我が山上憶良の使つた「言霊」の意味は今日では議論が動揺して居る。然るに徳川時代の国学者は之を神聖神秘なものに解釈してしまつた。そしてその神秘的な気持ちの故に、音と意義との結合や助詞の離合などに見える微妙を名附ける便利な語として「言霊」といふ語を盛んに用ゐた。（略）

（略）日本に於ける言霊学とか言霊派の起つたのは、言語の性質そのものに出発するので、その発生のそもそもの基底たるものは音義説で之は又

象徴説

ともいつて、之は相当に価値ある言語観である。（略）

我が音義派とは何をやつた連中かといふに、五十音図を元にして、或はその一字一字に特定の意味があると限定し、或は一行一行に特定の意味があると説いたものである。（略）

③

西洋で之に類するものは古くプラトンの「クラチルス」（西紀前四百年）で、音と意味との関係の外に、文字の霊を論じてゐる。千八百三十年（天保元年）にドレクスレルといふドイツ人が「科学的構造の基本」といふものを書き、千八百五十二年（嘉永五年）にウヰンバルグが「単語の神秘」を書いて、共に文字の霊を論じてゐる例もあるから、我が音義派必ずしもひどく時代おくれではない。（石黒魯平『言語観史論』（昭和六年九月　郁文書院）

（略）私は研究史に入るに先立つて、日本民族の国語に対する信仰的態度が如何なるものであつたかを述べて置かうと思ふ。国語に対する信仰とは、国語といふ表現的行為を規定する感情或は心構へであつて、それは民族によつて相違すると同時に、神に対する場合の様に表現の場面によつても相違するであらう。古代日本民族の言語的表現行為を規定する感情或は心構へは言霊の信仰となり、それが祝詞、寿言、枉言、忌詞となつて現れて居る。言霊の信仰とは、我々が発する言語には精霊があつて、その霊の力によつて表現の如くに事が実現すると信ずることである。（時枝誠記『国語学史』（昭和十五年十二月　岩波書店）

④

古代ギリシャ語の「ロゴス」及び我が古語の「コト」が、「理」と「言」との両義を兼ね備へるに至つた径路は人間の生存が、吸ふ息に始まり、吐く息に終ることを知つた原

始の民には、呼吸の気息の翼に乗つて、我等の肉体に出入し、我等を霊動せしめる、ある玄妙な力が、宇宙の心核と彼等の思惟した中枢地点が、想像されたからで、その気息を原料として、互に思ふ心の通じあへる言語、それあるがゆゑに、巫祝を媒介に、神慮さへ窺ひ知ることの出来る言語は、我等の祖先の、驚異の的で無いわけには行かなかつた。（岡倉由三郎「序」）

人々が思惟の過程を助けその結果を記録する為に用ひた象徴は、最も早い時代から絶えず驚異と迷妄の根源であつた。全人類は、対象を支配する道具としての言葉の性質に強き感銘を与へられた為、どの時代に於ても言葉には神秘な力が籠つてゐると考へてきた。初期の埃及人の態度と現代詩人の態度とは一見殆ど区別が存しないやうである。ホイットマンは（略）「総ての言葉は霊的であり、又言葉程、霊的なものはない。言葉は何処から来たのか。今日に伝はる迄に幾千年幾万年を経過して来たことであらう」と言つてゐる。言葉に関する迷信が及ぼす深甚なる影響を知悉するでなければ、最も慎重なる思索をも尚ほ且つ損ふところの汎く流布せる或る種の言語習慣の不変性は、到底了解されるものではない。（略）

古代埃及では第八のもの、即ち名の霊（略）の死滅を防止し神々の名と共にそれが永続するやうに注意が払はれた。ピラミッドの刻文には Khern（即ち語）といふ神のことが書かれてゐて、語は人間の様に人格を備へてゐた。

（C・オグデン・I・リチャーズ『意味の意味』（石橋幸太郎訳　昭和十一年一月　興文社））

ちなみに、引用②の『言語観史論』には、引用④の『意味の意味』への言及が見られ、その影響力の一端がうかがえる[3]。それはともかく、ここで重要なのは、「文字の霊」の用例が見られる著作の中に、言霊について解説した言霊論を展開するもの（引用①）だけでなく、言霊言説・神秘的言語観の成立について考察した、言語学等の著作（引用②～④）も見られるということ。つまり、本作品における「文字の霊」という発想の源、そして読者を取り巻くコンテクストとしては、勝又氏が指摘する[4]言霊論だけでなく、言語学等も考察の対象となり得るのである。

引用②には、「音と意義との結合や助詞の離合などに見える微妙を名附ける便利な語として「言霊」といふ語を盛んに用ゐた。」とあり、本作品には、「単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここ迄思い到った時、老博士は躊躇なく、文字の霊の存在を認めた。」とある。この類似は、博士の主張が言霊論であることを示しているが、本作品では言霊言説の誕生とその内容を主題としていることからも、言語学の参照は重要と言えよう。特に引用④の『意味の意味』は、いつ頃言霊言説・神秘的言語観が成立したか（時期）ではなく、そのような言説がなぜ誕生してしまうのか（発生のメカニズム）を考察しており、本作品を解釈する上で示唆に富む。

「文字の霊」という言葉から、当時の読者は、言霊論、そしてその成立について考察する言語学等を連想したと考えられる。以下、本作品において、言霊論はいかにして発生するとされ、どう禍するとされているかを考察する。詳細は以下に述べるが、禍と、言霊言説＝「文字の霊」が発生する理由は、共に根を同じくしている。

二　「文字の霊」が現われる原因

霊的な力によって、文字は一定の音と意味をもつという言霊論・神秘的言語観は、どのようにして誕生するのか。その誕生の仕方は、無論一通りではなく、様々な可能性がある。本作品ではどうか。博士が尋ねてまわるのは、文字＝書き言葉を知らない者ではなく、「最近に文字を覚えた」「職人」や「猟師」、「七十歳を越した老人」[5]であること。これらの人達が「最近に文字を覚えた」とあることから、作品の舞台は、文字が一般に浸透しつつある、文字を中心とした文化への過渡期にあると考えられること。博士が「唯一つの文字を」見詰めること。そして事の起こりが図書館＝文字の山での異変にあること。以上から、文字＝書き言葉（その定着）が、言霊論誕生の原因とされていると考えられる。

なぜ文字が原因となり得るのか。結論をまず述べると、話し言葉中心の文化（後述のマリノウスキーの言葉を用いると、「原始言語」の文化）では、言葉に意味が含まれているとは考えられず、言葉は状況や話者と不可分に結びついて、そのつど意味が新たに再生産され続ける。それに対し、文字は表出者とその人を取り囲む状況から切り離されているため、書き言葉中心の文化では、言葉は一定の意味をもつという考えにたどり着く可能性がある。言葉について考察する際に、表出者や状況が埒外におかれると、「言葉―表出者と状況―意味」における言葉と意味を結ぶ「表出者と状況」のところに、代わりに霊的な力が立てられ得るからである。ついでに言うと、言葉は一定の意味をもつという考え方が一度成立してしまえば、話し言葉も多かれ少なかれその影響を受けることになろう。

このような言霊発生のメカニズムを考える上で参考になるのは、前述の『意味の意味』である。以下は同書の一節。

> （略）言葉はそれだけでは何物をも『意味し』ないといふことは今日でこそ周知の事実であるが、次章にも述べる如く、嘗てはその反対の説も同様に信じられてゐたのである。思惟者が使つて始めて言葉は或る物を表はす。言ひ換へれば或る意味合ひの『意味』を有つ。（第一章）

次に或る事を述べたり又はそれを理解する時に含まれる三要因を挙げる。

（1）心的過程（2）象徴（3）指示物―『それに就て』考へられる或る物。

象徴法の理論的問題は―これら三者が如何に関係してゐ

るか？―である。

我々は議論や論述に於ては言葉を用ひねばならぬので実際上の問題は―言葉に対する習慣的態度と、もはや公然とは主張されてゐないが実際には有力な学説に基づく、今尚ほ残存せる臆説の為に、我々の議論が如何に曲歪されてゐるか？―である。

これらの臆説の主要なるものは、事物の一部と考へられてゐる名称を魔術的に見る理論、即ち象徴と指示物の関係の内在説から由来してゐる。この伝統は、事実に於ては、言葉の確定した意味を探求しようとする。この習慣の根絶は記号一般の研究に依つて達成される。（略）

言葉の魔術は一般的魔術の中では特殊の位置を占める。最近迄の言葉に対する自然の態度が如何なるものであつたかを知らなければ、論理学者や他の近代神秘主義者の行為は十分に理解されないであらう。と言ふのは、この古くからの態度が今日も尚ほ裏面に於て隠約の中につき纏つてゐるからである。（概要）

読む・聞くにせよ、書く・話すにせよ、言葉が意味をもつのは、思考する者（「心的過程」）が言葉と意味の間に入り、この二つをつなげるから。その思考する人間を不自然にも消去し、言葉と意味を直接につなげてしまう時、直接につなげる（消去された人間以外の）何か＝魔術的な力があるとされ、言葉は神秘的なものとなる。

同書には補遺として、ブロニスロー・マリノウスキー「原始言語に於ける意味の問題」が収録されている。この論文は、オグデンらの主張を補強するもので、中島敦が後に訪れる環礁の言葉も考察対象となっている。以下はその一節。

もう一度土人の言葉に返つてみれば、原始言語に於て単語の意味が文脈に左右されること多大である点は、特に強調する迄もない。『木材』、『橈を用ひる』、『場所』等の語は、その含まれる文脈によつて土人に伝へられる真の意味が何であるかを示す為には、自由訳に翻訳し直ほさねばならなかつた。又『我々は（目的たる）村の近くに着く』、即ち文字通りに言へば『我々は場所で橈を用ひる』といふ表現の意味は、全文の文脈で考へて始めて決まる、といふことも同様に明瞭である。又この全文も、若しこの表現が許されれば、境地の脈絡（context of situtiion）の中に置いて始めて意味が明瞭になる。境地の脈絡といふのは、一方文脈（context）といふ概念が拡張されねばならないことと、他方言葉が発せられる境地（situtiion）といふ語は言語に関する表現には不適当でその儘用ひられないこととを示す為の私の造語である。（略）

然し我々がその大抵を書かれた記録として考へる近代の文明言語や、刻銘にのみ残存せる死語から、嘗て書き物に用ひられたことなく総ての材料が唯人から人へと伝はる、翼を有つた言葉にのみ生きてゐる原始言語に移ると、言語

表出の中に含まれたる意味といふ概念は、謬想で且つ無益であることが直ちに判明するであらう。実際生活に於て話される説述は、それが表出される時の境地から分離されることはない。といふ訳は、人間の言葉による説述は、その瞬間に、そしてその境地に於て現存し、何かの理由で―共通の行動に役立たせる為か、純粋に社会的交際の結帯をつくる為か、乃至は話手の激しい感情、熱情を吐露する為に―他の人又は人々に知らせる必要のある思想・感情を表現する目的と作用とを有つてゐるからである。その瞬間に或る命令的刺戟がなければ、説述が表出される筈はない。だから、各々の場合に於て、言語表出と境地とは相互に結ぼれ解けぬもので、境地の脈絡は言葉の理解に欠くべからざるものである。話言葉や字言葉の現実に於て、言語脈絡（linguistic context）のない語は虚構であつてそれ自体何物をも表はすものではないのと全く同様に、生きた話言葉の現実に於ても、言語表出は境地の脈絡に於てでなければ意味を有たない。

話し言葉中心の文化では、言葉が一定の意味をもつとは考えられない。言葉は常にそれが発せられる状況、発する（受け取る）人と結び付いており、意味はそれらに応じてそのつど決まる。換言すれば、言葉の意味は一定ではなく、状況等に応じて再生産され続ける。無論、このような文化からも、神秘的言語観がでてくることはあろう。しかし、少なくとも、言葉と意味を直接つなげる何か＝魔術的な力といった出方はしない。

本作品は、文字の使用が一般にも広がりつつあるアッシリアが舞台。博士は、言葉（文字）と意味をつなぐ思考する者＝博士自身や状況を見ず、言葉と意味とをつなぐのに「文字の霊」をもってした。これは、『意味の意味』が古今東西の神秘的言語観の成立について考察するところと一致する。言葉と意味をつなぐのに「文字の霊」をもってすることで、文字は思考する者や状況から独立したものとされるようになる。状況等に関わりなく、常に一定の意味をもつことが自明視されるようになるのである。状況等に依存しない、魔力をもつ文字観は、便利であると同時に、それに応じた禍をももたらすことになる。次章ではその禍について述べる。

三　状況等からの独立がもたらす禍

これまで話し言葉で生活を営んでいた人達が、状況等から独立した文字を覚え、文字を中心とした（文字で考え、文字を通して世界を見る）生活が当たり前になるまでの過渡期。最近になって猟師等が文字を覚えたという過渡期には、状況等から切り離された文字の不便さや、図書館の書物＝文字が霊力をもち始めたことへの違和感が、最も実感される。それらが禍として認識されても不思議はない。

（略）しかし、ナブ・アヘ・エリバは最後に斯う書かねば

ならなかった。「文字ノ害タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ッテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、猟師は獅子を射損うことが多くなった。（略）

（略）文字の無かった昔、ピル・ナピシュチムの洪水以前には、歓びも智慧もみんな直接に人間の中にはいって来た。今は、文字の薄被（ヴェイル）をかぶった歓びの影と智慧の影としか、我々は知らない。

前述のように、話し言葉の文化では、言葉と意味は状況等と不可分であり、言葉はその状況その状況に適した意味をもつ。それは、あたかも「歓びも智慧もみんな直接に人間の中にはいって来」るかのように感じられるであろう。そのような言葉の用い方をしていた猟師が、状況等を介しない文字を通して世界を見るようになれば、状況の微妙な変化に対応できず、「射損うことが多くな」るのは当然と言えよう。

過渡期故に、言葉を用いる上で、まだ状況等が重要な役割を担う文化では、状況から切れてしまった文字は使い勝手が悪く、役に立たないこともしばしばであろう。そのことを端的に示すのが「書物狂の老人」の例である。

ナブ・アヘ・エリバは、或る書物狂の老人を知っている。（略）彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、今日の天気は晴か曇か気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉をも諳んじている。しかし、息子をなくした隣人を何と言って慰めてよいか、知らない。

老人は「少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉」＝文字を知ってはいるが、その言葉は、老人の現実の生活においては使い道がないとされている。「少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉」は、その状況でのみ、然るべき意味をもつからである。

青年達の「浅薄な合理主義」を、博士が「文字の霊」による禍と考えたのも、言葉が状況等に依らず一定の意味をもつことと関わる。

（略）此の古来の医家の常法（患者の服を医者が着ることで、死神の眼を欺こうとすること――河内注）に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。之は明らかに不合理だ、エレシュキガル神ともあろうものが、あんな子供瞞しの計に欺かれる筈があるか、と、彼等は言う。碩学ナブ・アヘ・エリバは之を聞いて厭な顔をした。青年等の如く、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。（略）彼等は、神秘の雲の中に於ける人間の地位をわきまえぬのじゃ。老博士は浅薄な合理主義を一種の病と考えた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

青年達の合理主義的な考えは、状況と結び付いたものではない。状況はそのつど変化し、一定ではない（「神秘の雲の中」）ため、本来「何事にも辻褄を合せ」ることは不可能である。辻褄合わせは文字によってのみ可能なことだが、状況から切れた文字によって辻褄が合ったところで、次の状況に対応できる保証はない。その意味で、合理主義は、状況を介さぬ文字のもたらす禍である。

言うまでもなく、博士はここまで整然と考えている訳ではない。博士は、文字のもたらす禍は、文字が状況等から独立しているが故に起こるという結論の手前までは来るのだが、結局いつも、「文字の霊」の仕業だという結論に着地している。これは、文字が霊力をもつという言語観の禍と言えるが、先回りして述べれば、このような博士の隔靴掻痒な研究が、自らの首を絞めることになる。

ある状況で言葉を発することで、その状況における意味をもつ文化では、あり得ないことだが、状況等から切り離されることで、言葉（文字）は一定の意味をもつと同時に、意味をもたなくとも差し支えのないものとなる。状況等から切り離された文字は、「意味の無い一つ一つの線の交錯」であってもかまわなくなるからである。そのような文字観をもった者が、文字を介して世界と向き合うとどうなるか。

実際、もう大分前から、文字の霊が或る恐しい病を老博士の上に齎（もたら）していたのである。（略）彼が一軒の家をじっと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰との意味もない集合に化けて了う。之がどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。

（略）人間の日常の営み、凡ての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今迄の意味を失って了った。最早、人間生活の凡ての根柢が疑わしいものに見える。ナブ・アヘ・エリバ博士は気が違いそうになって来た。

「奇体な分析病」なる禍は、言葉が状況等から独立すること＝文字に、その原因がある。「文字の霊」が生じる原因も、同じく言葉の独立にあるため、博士が「分析病」を「文字の霊」の仕業と考えたとしても、不思議はない。独立することで、言葉が常に一定の意味をもつことも問題・禍だが、独立したために、無意味であってもかまわなくなることにも問題・禍が見出されている。

先行研究では本作品の中でも異質な要素とされてきた、博士と「歴史家」イシュデイ・ナブとの対話も、状況等から切り離されてもなおかつ意味をもつという文字観と関わっている。

或日若い歴史家（或いは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？　と。

（略）先頃のバビロン王シャマシュ・シュム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月程の間、絶望の余り、言語に絶した淫

蕩の生活を送ったというものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けたというものもある。第一の妃唯一人と共に火に入ったという説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り煙になったこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王は其等の中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じ給うであろう。これはほんの一例だが、歴史とは之でいいのであろうか。（略）

書洩らしは？　と歴史家が聞く。

（略）書かれなかった事は、無かった事じゃ。（略）

ボルシッパなる明智の神ナブウの召使い給う文字の精霊共の恐しい力を、イシュディ・ナブよ、君はまだ知らぬと見えるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉えて、之を己の姿で現すとなると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのじゃ。反対に、文字の精の力ある手に触れなかったものは、如何なるものも、その存在を失わねばならぬ。

「自ら火に投じたことだけは確か」。しかし、それに付随するディテールに関する証言に、歴史家は食い違いを感じ、選ぶのをためらっている。歴史家の感じる食い違いは、武弘が死んだことだけは確かだが、それに付随するディテールに関する証言に食い違いを感じさせる芥川龍之介「藪の中」（『新潮』大正十一年一月）を想起させるが、何故歴史家は一つを選ぶことに悩まねばならないのか。

仮に、相異なる証言の中から「一つを選んで」、「記録」＝文字化するよう命じられることがないとすれば、歴史家は悩むことはない。日常会話やゴシップのレベルでは、一つの事実なるものを突き止めようとでもしない限り、それぞれの発言が相反していても問題はない。自分に都合のいい発言を選ぶなり何なりすれば、それですむからである。実際、視野の範囲や感覚、立場、利害関係など、一人一人観点が異なる以上、たとえバビロン王の部屋に設置されたビデオカメラに基づいたとしても、証言が食い違うことは十分にあり得る。ある人は、「絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送った」と言い、またある人は、「毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けた」と言い、別のある人は、「バビロン王は一日の半分を淫蕩に耽り過ごし、残り半分はシャマシュ神に祈りを捧げ暮らした」などと言うかもしれない。歴史家が悩むのは、食い違うのが当然とも言える証言の中から一つを選び、その一つのみが発話者と聞き手（状況等）から切り離されるが故に、万人にとっての事実になりかねない、歴史・記録の飛躍的な性質故と考えられる。

本作品には、「図書館（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）」という一節がある。歴史家が取捨選択的に書き記したものは、歴史書として図書館に保管され、二千五百年後の人達に万人の事実として扱われる。これはアッシリアでの話だが、当時日本では、取捨選択的に編纂された記紀が、万人にとっての事実として扱われ、「東亜」建設の正当であることの根

拠として使用されていた。引用は避けるが、前掲の『言霊研究入門』の「御幸（ミユキ）と征討との言葉の間違ひ」等はその典型である。

食い違う証言群の中の一つ、一観点による証言を、発話者や状況から独立した万人の事実とすること。歴史家の目には、このことは飛躍と映った（「歴史とはこれでいいのであろうか。」）が、博士の目には、「文字の霊」の「恐しい力」と映った。博士は歴史家に、「彼等精霊の齎（もたら）す害も随分ひどい。わしは今それに就いて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、其の霊の毒気に中（あた）ったためであろう。」と言うが、「霊の毒気に中（あた）っ」ているのはむしろ博士の方である。状況等から独立することで生じる飛躍＝禍に、文字に霊的力を認めるが故に気が付かない、「文字の霊」がもたらす禍、と言えよう。

本作品の最後で博士は、そのような「文字の霊」の禍に気付く。そして、「文字への盲目的崇拝を改め」ねばならないと、大王に「政治的意見」を加えた報告を献じる。博士は謹慎を命じられ、数日後命を落とすのだが、仮に博士が文字ではなく、対話で大王に意見を伝えたとしたら、同じ結果になったであろうか。対話では、相手の顔色等を見ながら言葉を選ぶ。「ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王」の表情に陰りが見えれば、自分の意見がナブウ神とその讃仰者である大王を批判し、大王の機嫌を損ねていることに気付き、言葉を変えるのではあるまいか。「大王の幼時からの師傅」である博士には、対話による意見の伝達も可能と考えられる。にもかかわらず、自らの意見を伝えるのに文字をもってするというのは、博士の「文字への盲目的崇拝」を示しているのではあるまいか。博士から独立した文字は「いたく大王の御機嫌を損じ」、博士は「思わぬ御不興に愕然と」して、「文字の霊の復讐であることを悟」る。状況等に依らぬ文字は、読者の反応に関係なく、一定の意味を相手に伝えてしまう。それは時に、人間関係に「思わぬ」禍をもたらす。

前章では言霊論誕生の原因（＝状況等からの独立）について述べた。そして本章では、その原因により生じる問題・禍を、本作品の構成に即して、箇条書きの形で述べた。

作品発表当時の日本においては、言霊言説や、記紀類などの歴史書は、日本・天皇の神性を根拠付けるものとして再評価（再登場）されていた。そのため、言葉についての枠組みが変化しつつあった作品世界・古代アッシリアに、ある意味で似た状況だったと言えよう。変化しつつある時というのは、変化に対する違和感をもつ者が最も現れる時でもある。そのような違和感の所産であろう本作品は、言霊が誕生する原因は、言葉を使用する人間と、置かれた状況を消すという不自然な行為にあることを示し、歴史書が抱える飛躍をも示す。そのような本作品には、日本・天皇の神性の根拠の妥当性を問う文脈がある。

また、サルトルの『嘔吐』等、日常的な意味の層が剥げ落ちる事態を扱う作品が、この時期にでてくるということは、先行研究の指摘する通りである。本作品では、そもそもなぜそのよ

うな事態が生じてしまうのかということが、「文字の霊」の誕生と絡めて描かれている。言葉を使用する者、状況から切り離された言葉は、意味をもたなくとも差支えなく、無意味な言葉のフィルターを通して見た世界は無意味である。本作品は、日常的な意味の層が剥げ落ちる事態が生じたことに、このような解答を与えていると言えよう。

最後に、『言霊研究入門』（前掲）には「言霊とラヂオ」という項目があり、「今日ラヂオと音響（言霊）の研究は可なり進められてはいるが」といった一節が見られる。文字だけでなく、話し言葉にも霊が宿っているとするこの一節が示唆するように、ラジオ等には、話し言葉の文字化を促進する側面があると考えられる。聞き手の側の状況や反応とは無関係に、言葉を一方的に送りつける行為は、本作品の最後で博士がとった行動と変わるところがなく、その根底には、状況等に依存せず一定の意味をもつという文字的な言葉観が横たわっている。話し言葉の文字化が進めばどのような問題が生じるかは、本作品の示す通りである。

日本・天皇の神性、日常的な意味の層の剥げ落ちる事態、ラジオ等は、それぞれ無関係に思えるであろうが、実は同根の事柄なのである。

四　古譚四編の中での本作品

本作品は、文字中心の文化へと移行する過渡期の世界を仮構することで、言霊発生の原因と、言霊が発生してしまう文字観の孕む問題を示した作品、とまとめられる。古譚四編に共通する大きなテーマが言葉であることは、先行研究に指摘があるが、本作品以外の作品も、文字＝書き言葉と話し言葉というテーマで論じることは可能と考える。

「山月記」は、妻子を顧みず、詩によって名を成そうとした李徴が虎になる話である。李徴は、詩作に励むのに、人と交わろうとしない男とされている。

> （略）いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽った。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。（略）
>
> 何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。（略）己は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。

李徴は、書き言葉を追い求め、話し言葉を使おうとしない人物、と言い換えることができよう。

李徴が妻子を顧みない点は、一般に人間性（愛情）の欠如と解される。本稿での考察に引き付ければ、妻子とは、話し言葉

で接する機会が最も多い相手と解することができる。そうだとすれば、「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけている様な男だから、こんな獣に身を堕すのだ。」という李徴の反省は、次のように解することができよう。即ち、話し言葉を軽視し、書き言葉ばかり追い求めるから人間ではなくなるのだ、と。こう解釈する方が、この一文の統一性という点からしても、妥当ではあるまいか。ついでに言えば、袁傪が李徴の詩に「(非常に微妙な点に於て)欠ける所がある」と感じるのも、状況等への密着さという話し言葉の要素の欠如故であろう。話し言葉を軽視し過ぎた李徴が、虎になることで、話し言葉しか使えなくなるアイロニーが読み取れる。

「木乃伊」を書き言葉、話し言葉というテーマで解釈するのは難しく、しいて言えば、この二つの言葉に依らない記憶の世界を描いた作品、となろうが、「狐憑」をこのテーマで解釈するのは有効であろう。

「狐憑」は、ネウリ部落のシャクに様々な人間や動物の霊が乗り移り、話をする、書き言葉が存在しない文化の話である。状況・生活密着型の話し言葉の文化にいるにもかかわらず、霊に憑かれてするシャクの物語は、状況等から切り離された書き言葉によるものに極めて近い。

> 今迄にも憑きもののした男や女はあったが、斯んなに種々雑多なものが一人の人間にのり移った例はない。或時は、此の部落の下の湖を泳ぎ廻る鯉がシャクの口を仮りて、鱗族(いろくず)達の生活の哀しさと樂しさとを語った。或時は、トオラス山の隼が、湖と草原と山脈と、又その向うの鏡の如き湖との雄大な眺望について語った。(略)
>
> シャクの物語がどうやら彼の作為らしいと思われ出してからも、聴衆は決して減らなかった。(略)それがシャクの作り話だとしても、生来凡庸なあのシャクに、あんな素晴らしい話を作らせるものは確かに憑きものに違いないと、彼等も亦作者自身と同様の考え方をした。憑きもののしていない彼等には、実際に見もしない事柄に就いて、あんなに詳しく述べることなど、思いも寄らぬからである。

傍線箇所は、彼等の言葉が状況・生活と不可分であることを示すと同時に、シャクの物語が本来書き言葉によってなされる類のものであることを示している。シャクのする書き言葉的な話が、「霊」によるものとされているのは、「文字の霊」が現われる本作品とテーマが重なることを示唆していよう。

「狐憑」は次の一文で終わる。

> ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデェスが、あの美しい歌どもを唱い出すよりずっと以前に、斯うして一人の詩人が喰われて了ったことを、誰も知らない。

ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』[6]は、ホメロス研究を概観し、その韻律や「人間の活動」に密接に関係

した言葉などを根拠として、ホメロスの詩は「声の文化」に根差したものとしている。「狐憑」には、

但し、斯うして次から次へと故知らず生み出されて来る言葉共を後々迄も伝えるべき文字という道具があってもいい筈だということに、彼は未だ思い到らない。

という一節があり、前述のように、シャクの物語は本来書かれるべきもの・書き言葉によるものとされていると考えられる。書き言葉が存在しないネウリ部落では、書き言葉で語る者が、冬が終わり、「再び外へ出て働」こうとして働けなくても、不思議はない。小説の最後の一文は、ホメロスが詩を「唱い出す」（話し言葉による詩）以前に、書き言葉によるとしか思えない物語を語る詩人がいたが、無益とされ食べられた、と解することができよう。

以上、簡単ではあるが、本作品以外の作品も、書き言葉、話し言葉という観点から解釈できることを示し得たのではあるまいか。本作品に、霊的な力をもつ、状況等から独立した文字観をもつことへの警鐘というメッセージを読み取ることは、古譚四編として見ても、不自然ではないと考える。

関東大震災以後の印刷技術向上により、雑誌や本が大量に印刷され、結果、市場には文字が溢れた。そのような状況にあって、古譚四編は、話し言葉を視野に入れつつ書き言葉の性質を問い直し、言葉について多角的に考察できる作品群としてものされた。先行研究には、本作品に戦時中における思想・言論弾圧への風刺を読み取るものが、いくつかある。確かにそのような要素は認められる。しかしながら、そのようにのみ解釈してしまうと、戦後となった現在においては、本作品は既にその役割を終えており、扱う必要がなくなってしまうのではないか。古譚四編を、文字や話し言葉について多角的に考察できる、いわば実験場として捉える方が、当時はもちろんのこと、ネットや携帯電話など文字への依存度の高い現在においても意義があると考える。

【注記】

1　「山月記」の初出は『文学界』（昭和十七年二月）。「狐憑」、「木乃伊」の初出は『光と風と夢』（昭和十七年七月　筑摩書房）。

2　以下、中島敦の作品の引用は全て『中島敦全集1』（平成五年一月　筑摩書房）による。本稿における引用文中の傍線は全て筆者によるもので、ルビは適宜省略した。

3　『意味の意味』は発行後、何度か版を重ねている。本作品発表前では、昭和十六年六月に第三版が発行されている。

4　『国文』（平成十二年一月）。

5　七十を過ぎて女という書き言葉を覚えたというのは、やや不自然に思われるが、女という話し言葉を覚えたとは考えられない。博士が考察の対象としているのは文字＝書き言葉と考えられよう。

6　桜井直文他訳、平成三年十月、藤原書店。

（九州大学人文科学研究院専門研究員）